



宮古島市教育委員会

新
宮古島市 neo 歴史文化ロード

あ

綾道

や

ん
つ

伊良部島コース

宮古島市 neo 歴史文化ロード
綾道 → 伊良部島コースへ



絶 景 道

あ
や

ん
つ



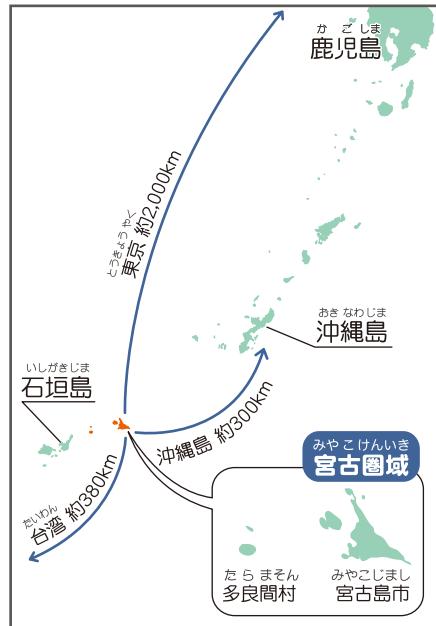
おもむき　みち　みやこ
「趣のある道」のことを、宮古のことばで「あやんつ」といいます

みやこじまし いちめんせき **宮古島市の位置と面積**

みやこじましだいしょうしまみやこじま
宮古島市は大小6つの島(宮古島、
いけまじまおがみじまくりまじまいらぶじましも
池間島、大神島、来間島、伊良部島、下
じじまこうせい
地島)で構成されています。

そう めん せき へい ほう じん
総面積は204平方キロメートル、人
こう やく まん だい ふ ぶん
口約5万6,000人で、人口の大部分は
ひら ち く しゅうちゅう
平良地区に集中しています。

しま ぜん たい へい たん さん がく ぶ おお
島全体がほぼ平坦で、山岳部や大き
か せん せい かつ よう すい
な河川もなく、生活用水などのほとん
ち か すい たよ
どを地下水に頼っています。



い ら ぶ ち く 伊良部地区

い ら ぶ ち く しもじ
伊良部地区は、伊良部島と、下地
島のふたつの島で成り立っています。

人口は約5,300人(2015年現在)で、
無料の橋としては日本で一番長い伊良部大橋によって、
宮古島と結ばれています。

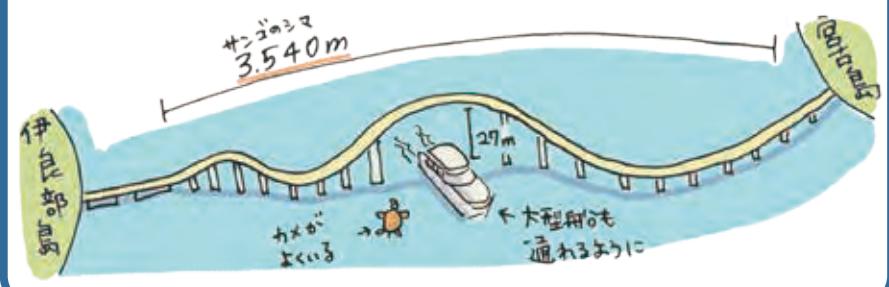


い ら ぶ おお はし 伊良部大橋



りとう
離島の離島である伊良部島にとって
おうらいふねか
宮古島との往来に船が欠かせませんでした。

1940年6月30日に、平良港から渡口の浜へ向かう
連絡船「伊良部丸」が、折からの強風に煽られ、島を
目の前にして沈没し、73名が犠牲となる海難事故が
発生しました。事故から75年となる2015年1月31
日、島民の念願であった伊良部大橋が完成し、船に代
わる新たな大動脈となりました。



伊良部島 散策マップ

白鳥崎岩礁海岸地域 P42



宮古島市neo歴史文化ロード 綾道(伊良部島コース)

宮古島市の位置と面積	02
伊良部地区/宮古島と伊良部島を結ぶ伊良部大橋	03
伊良部島 散策マップ	04
北区(佐良浜) 池間添・前里添	08
伊良部島だけで完結？！カツオ漁のしくみ	09
佐良浜 散策マップ	10
佐良浜ミタークツツ 市指定無形民俗文化財	12
大主御嶽 拝所	14
3つの大主御嶽	15
命根御嶽 拝所	16
秋田の人が祀られる大和神屋～秋田能代船 漂流記～	17
サバウツガー 市指定史跡	18
ヤマトブー大岩 市指定史跡	19
牧山台地のアブ群 市指定史跡	20
ピヤーズ御嶽(クンマウキヤー) 市指定史跡	22
豊見氏親ものがたり	23
南区(伊良部) 佐和田・長浜・国仲・仲地・伊良部	24
サトウキビと島/下地島と空港	25
入江と集落	26
佐和田・長浜 散策マップ	28
黒浜御嶽 市指定史跡	30
村建てのお話/旧暦と干支	31
佐和田の浜珊瑚礁・礁湖面 市指定記念物(名勝)	32
さまざまな珊瑚礁	33
魚垣 市指定有形民俗文化財	34
アラガー 市指定史跡	36

佐和田ユーコイ(嵩原御嶽) 市指定史跡	37
腕山御嶽 拝所	38
島のルーツを探れ！	39
大竹中洞穴 市指定天然記念物(地質・鉱物)	40
白鳥崎岩礁海岸地域 市指定記念物(名勝)	42
宮古の島を守る！？植物たち	43
下地島の通り池 国指定名勝および天然記念物	44
継子伝説	45
下地島巨岩 市指定史跡	46
ヨナタマ伝説～繰り返し押し寄せた古代大津波の証～	47
国仲 散策マップ	48
伊良部村役場跡 史跡	50
伊良部島の発展に尽力した村長 国仲寛徒	51
国仲御嶽の植物群落 県指定天然記念物(植物)	52
伊良部島の戦跡	54
仲地・伊良部 散策マップ	56
乘瀬御嶽 市指定史跡	58
玉メガものがたり/ウプカニ御嶽	59
スサビミヤーカ(巨石墓) 市指定史跡	60
フナハガー 市指定史跡	61
伊良部のナカドゥイ御嶽 拝所	62
仲地のナカドゥイ御嶽 拝所	63
神里ガー 市指定史跡	64
ダキフガー 市指定史跡	65
下地島南・西岩礁海岸 市指定記念物(名勝)	66
伊良部島の歴史	67
文化財の体系図	68

きたく
さらはま
北区(佐良浜)
いけまそえ まえさとそえ
池間添・前里添



1965年の佐良浜 (沖縄公文書館 USCAR広報局写真資料12-4 46-36-1)

18世紀の中頃、琉球王府の命によって強制移住させられた池間島の14戸が、初めて佐良浜に定住しました。現在は池間添と前里添のふたつの字があり、漁業を中心に栄えてきました。

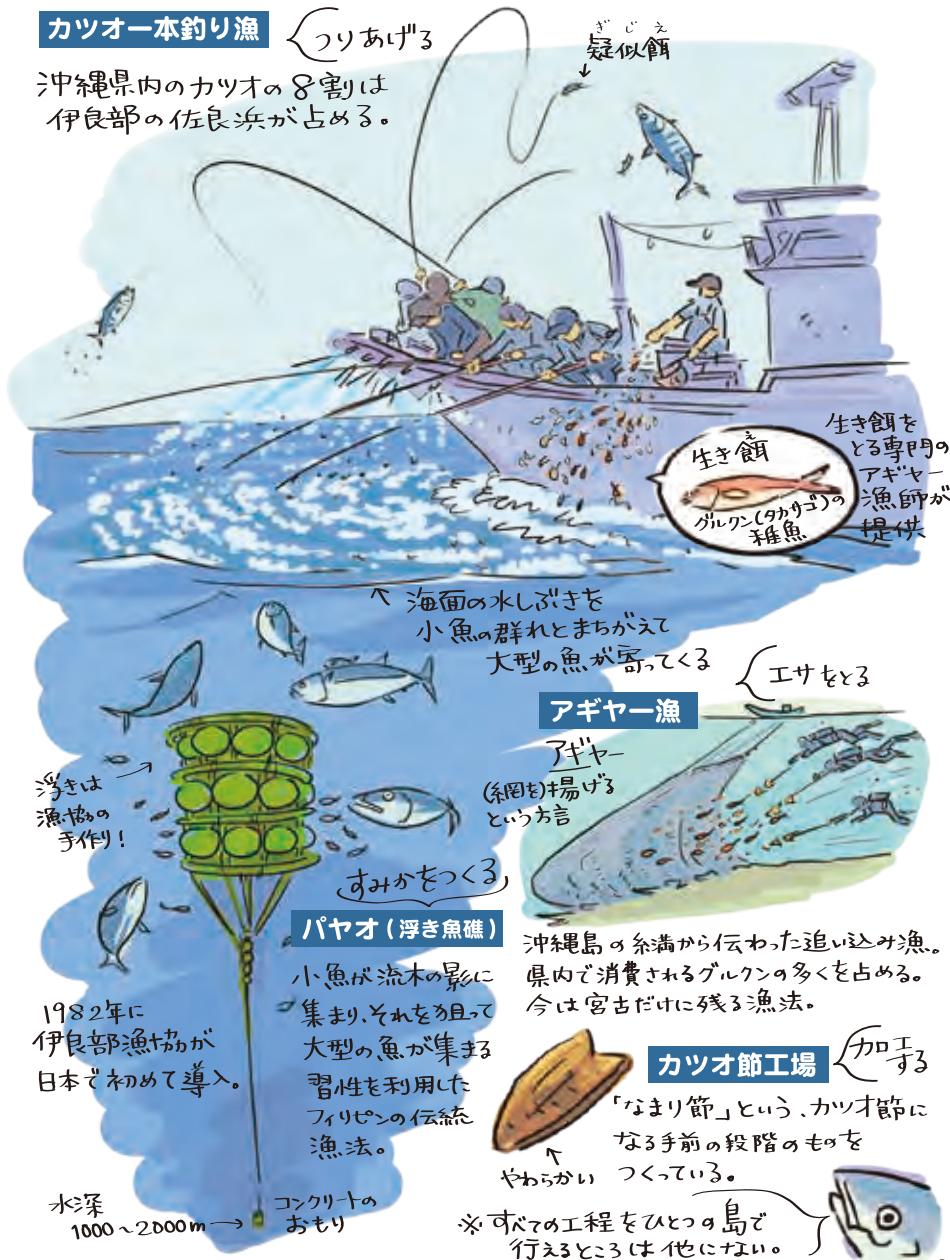
鹿児島出身の鮫島幸兵衛によって、池間島で始められたカツオ漁は、1909(明治42)年に佐良浜へも伝わりました。また、愛媛から女工を招いて、カツオ節の製造も始まりました。

佐良浜の地名の由来は、ザラザラとした石のある浜辺を「佐那浜」と呼んだことによります。

いらぶじま
伊良部島だけで完結？！カツオ漁のしくみ

カツオ一本釣り漁

沖縄県内のカツオの8割は伊良部の佐良浜が占める。



さらはま
佐良浜ミヤークヅツ



佐良浜のミヤークヅツは、池間添と前里添の人たちが総出で行う盛大な祭りです。「ムトウ」を中心に行われ、旧暦の八月または九月の甲午の日から4日間にわたって行われ、初日を「アラビ」、2日目を「ンナカヌヒー」、3日目を「アトヌヒー」、4日目を「ブトイビー」と呼びます。

佐良浜のミヤークヅツは、元島もとじま※2である池間島から伝わり、同じ元島を持つ西原地区でも行われています。



さらはま
佐良浜のミヤークヅツ

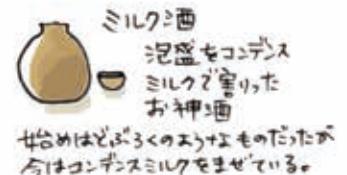
ミヤークヅツ：季節のかわり目に
行う節祭り
節



- ① まずは池間添、前里添のツカサがそれを守り口に祭りのせ合まりを大生御歎喚に報告。ツカサニ神役



今島から少し離れたところにある池間添のムトウ。佐良浜に生まれた人はいすれかのムトウに所属する。



始めはどぶろくのようでもあったが今はコンデンスマイルクをませている。



- ③ 4日間、
ひたすら踊り、
踊る!!

*1 ムトウ：「元」を語源とし、本島などでは血縁集団をいうが、古宮では村落内の祭祀儀礼集団と祭祀を指す。

また祭祀を行う場所を指すとも言われている

*2 元島：現在の集落の元、村建ての起源となった場所のこと

おはるずうたき

大主御嶽



佐良浜の大主御嶽には、池間島の大主御嶽の分神、「うらせりくためなうの真主」が祀られています。池間島から移住した人々は、1840年頃、佐良浜の地に大主御嶽を造るまで、海を渡り、元島である池間島で祭祀を行っていました。

現在では神社風の建物に改築され、この御嶽を中心として多くの祭祀が行われています。



3つの大主御嶽

大主御嶽は、池間島の人々の信仰の中心となる御嶽です。

池間島から佐良浜や西原地区に移り住んだ人々は、移住先でも大主御嶽を建て、ミヤークヅツをはじめとした多くの祭祀を行っています。



池間島の大主御嶽

佐良浜地区の大主御嶽



伊良部島



西原地区の大主御嶽



んぬつにーうたき

命根御嶽



命根御嶽は、人間の生命をつかさどり、魂を養っているとされる「ばがばうがなす」が祀られています。人生で道に迷い居場所を見失った時、この神様の助けて戻って来ることができる信じられています。

里に暮らす人たちの命の源(根っこ)として敬われ、航海安全や豊漁祈願のみならず、日々の生活の中に御嶽への祈りが根付いています。



秋田の人人が祀られる大和神屋～秋田能代船漂流記～

1744(乾隆9)年11月5日、秋田県能代の門田与次衛門ら8人が乗った船が、函館で積んだ荷を江戸へ運ぶ途中、金華山沖(宮城県石巻市)で大嵐にあいました。帆柱を失い沈没しかけながら、大海原を漂うこと80日。翌年1月24日に、下地島のナガピダ(下地島空港付近)の砂洲へ流れ着きました。

久保田藩(秋田県)の佐藤晚得が、当時74歳になる与次衛門から聞き取ってまとめた「清街筆記」に、漂着時のやりとりが残されています。

「待望の島が見え、麦畑の見える浅瀬に船を寄せて碇を下すと、大勢的人が群がり大騒ぎとなっていた。やがて、くり船が近づいて与次衛門たちの船に男が乗り込み、「ここは琉球のいらぶしまだ」といった。与次衛門は「我々を殺すか?」と聞くと、「殺さぬ」と男はいい、さらに「船を修理して、大和に還してやる」と答えた。」

どうにか助かった与次衛門らは、食事や衣装などを与えられ、一週間ほど佐和田で静養しますが、島にたどり着く前にふたりの乗組員が餓死

しており、与次衛門は島民に埋葬を頼みます。遺体は、せめてもの慰みにと、郷里・能代の方角が見渡せる佐良浜のヨコダキ(横岳)の地に、丁重に埋葬されました。

その後、佐良浜で弔ったふたりの初七日を済ませ、蔵元のある平良へと移り、伊良部島を離れます。損傷の激しかった船の修理にふた月ほどかかりましたが、1745(乾隆10)年4月、一行は宮古島を出帆。途中、苦楽を共にした水先案内人を病で失いますが、13ヶ月ぶりに郷里の能代へと帰還しました。

与次衛門らが島を去った後も、横岳の墓は島の人々に守られ、やがて大和神屋御嶽として祀られるようになります。大和の人人が関わる御嶽は学問の神様とされることが多く、いまは学問の神様としても敬われています。

参考：『秋田さきがけ新聞』(1989)



サバウツガー



サバウツガーは、井戸と階段までを含めた周辺一帯が史跡に指定されています。1966(昭和41)年8月に簡易水道が敷かれるまで、240年以上も佐良浜の人たちの生活用水として活用されてきました。海から見た地形がサメの口に似ているということから「サバウツ」と呼ばれているといわれています。潮の干満によって海水が混ざるため塩辛く、飲料水としては適していません。

※島の方言でサメを「サバ」、口を「ウツ」という



ヤマトブー大岩



この山のような巨岩は、大昔の地殻変動により、琉球石灰岩層が地上にむき出しになった一部で、高さ 25m、直徑 18m、重さ 3万トンあまりのトラバーチン^{※1}です。ここから切り出されたトラバーチンは、沖縄県産の装飾石材として国会議事堂にも使われています。またこの岩は比屋地に住み着いた人たちが、積上の浜へ向かう目印であったといわれています。

※1 トラバーチン：琉球石灰岩の一種。硬い石質で、磨きあげると美しい紋様が浮かびあがり、高級装飾石材とされている



まき やま だい ち ぐん
牧山台地のアブ群



いらぶじまなんどうぶ
伊良部島南東部の牧山台地に、雨水や地下水の浸蝕ででき
た縦穴のアブ(洞穴)群があります。深いものでは70m近くあ
り、内部からは化石骨なども見つかっています。

また、鍾乳石が発達している洞穴もあり、地質学的にも貴
重な区域となっています。



※7つのアブはそれぞれ個別に史跡の指定がされていますが、
ここではまとめて紹介しています

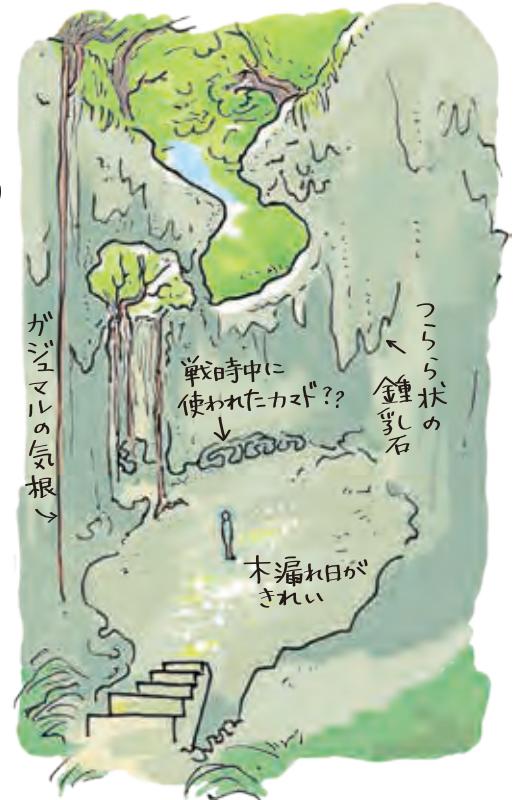
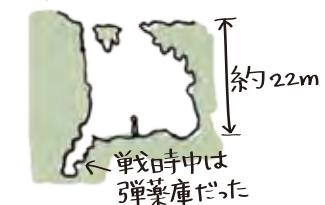
参考:『伊良部町洞穴群実態調査報告』(1994)

ヌドクビアブ

上から見た図

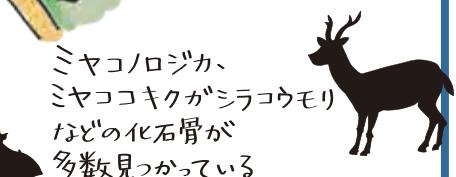
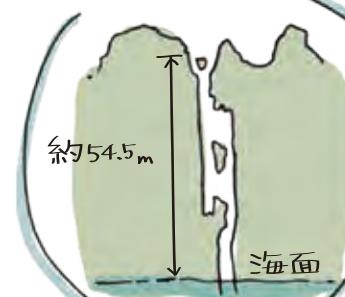


断面図



カナマラアブ

断面図



※洞穴内に柵などは設置されておりません。周辺の進入路を含め、暗く足元が悪く、大変危険です

比屋地 うたき

ピヤーズ御嶽（クンマウキー）



1380年頃、久米島より兄弟が来島しました。兄は八重山へ、弟はこの地で人々に鉄の農具を作り、農法を伝え、また礼法も指導し、住民から信頼と尊敬を受けていました。

弟の死後、人々は比屋地に御嶽を建て、守り神「あからともかね」として祀りました。

また、この御嶽には、大鱥(サメ)を退治した豊見氏親が脇神として祀られています。



豊見氏親ものがたり

むかし い ら ぶ じま とう ゆん うず うや
昔、伊良部島に豊見氏親という強
く勇ましく、恐れ知らずの勇者がい
ました。その頃、平良と伊良部の間
の海に大鱥が現れ、行き交う船を転
覆させては人々の命を奪っており、
みな こま 皆とても困っていました。

そのことを知った豊見氏親は、大
鱥の退治にのりだしました。比屋地
御嶽で大勝を祈り、ひとり小舟で沖
へ漕ぎ出しました。ところが、大鱥
に船もろとも飲み込まれてしまいま
した。豊見氏親は大鱥の腹の中で刀
を抜き、腹を何度も切りつけ、つい
には大鱥を退治します。夕方、腹を
切り裂かれた大鱥が浜に打ち上げら

れたので、これを見た島の人々は大
鱥の腹を裂いて豊見氏親を助け出
ますが、豊見氏親は身体中傷だらけ
で、まもなく息絶えました。

島の人々は豊見氏親を比屋地に葬
り、脇神として祀りました。

参考：『雍正旧記』(1727)



市指定古文書・典籍 刀剣及び古文書

クニマウキー??



昔は集落の → それが今まで
ことを「ファン」 → 「クン」に変化
といった

昔、琉球では神様が座って
いた戸町を「比地(ヒジ)」といい、
神様が住んでいた戸町を
「比屋地(ヒヤーズ)」といっていた。

つまり、比屋地(ヒヤーズ)は
「下牧(ファン)」や「前(マラキヤー)
」、「南(マラキヤー)」にある
「クニマウキー」

※地域によってクン・ファンなど、呼び方が変わる